



サン・トス港へ

3

號五十九百千一第

午後三時頃になつたので、領事館へ  
かられ世わして貰つた入船證を取  
降るさ、恰度其處に上原球陽協會の  
長とアロミツソンの坂本律道氏が  
がはなしして居られたので、ヤアア  
動くこと云ふので、上原氏と私共が  
互ひに手を出し合つて握手して後  
傍の椅子に腰をだれし、恰度良  
い處で會つたとして仲眞事件を  
なし合つたのであつた。  
双方同じやうに、仲眞事件の表面を  
化はれむ違遺憾であるとし、懲り  
い處で會つたとして仲眞事件を  
外人の手前將した邦人社會の爲め望  
ましい事なりとし、互ひ異つたの  
立場から之を善い方に導びかうで  
云ふ問題は是れ以上擴大せざるか  
はないかとはなし合ひ、坂本氏も  
傍がら、それは是非さうあつて欲  
しい事なりとし、互ひ異つたの  
のである。はなしは急走し進むと  
互ひの間に温味が生じ、上原氏か  
りは會を愛する念から、あなたの  
新聞(弊紙)に特に見出さ  
しに球陽協會支部長の肩書を使用  
して仲眞の事を書かれたるはつ  
云ふ意が、同じ書くくなれば、仲眞  
は同地の日本人會員でもあり、商  
業俱樂部員でもあつたのであるから、  
獨り球陽協會を肩書に用ひた  
云ふよかつたではないか、それが  
に小言を云はれたのであつた。  
其處で私はそれに對し、實は四月  
一日のアノ記事は、私も發行後に  
讀んで知つたのであるが、知るや  
直ちにそれを記者に糾して見る  
記者はそれに答へるに、球陽協會  
は在伯邦人團體中でも大きな團體  
であり、常に同縣人の爲めに良い  
上にも良くあらがえし努めて居る  
のであるから、球陽協會には尊敬感  
こそそれ、わきの感情なぞモ頭財  
づ腦はなく、見出したる肩書を球陽  
協會支部長さつゝは、仲眞が沖縄  
縣人であり、沖縄縣人として世に  
知られてゐる處からつい新聞記者  
としての意識が働き、さうした肩  
書を附したに過ぎない、その旨を  
以てしたのであるから、私は此の  
通りを上原氏に語り了解した求めた  
のであつたのだ。

【サントス廿九日】 蜜市訪問中  
だつたラッサ相は當日下枝ガルシア  
チー・グランチー（ホアルド）アルマンド  
のアルマンド聖州知事と朝食を共  
にし、午後二時四十分前に寄港し、  
た水上航行マリンバー號に搭乗。  
アルマンド知事に見送られつゝお

逮捕議員の釋放大統領　タ氏の見解

# 新設 伯國宣傳事務所 拙放を以て断乎拒絶の意見を俟ち

入商店經營の日の出  
歎受け申候に付今後  
品を吟味し各位の御  
申候へば多少に不  
景り度奉懇願候  
廿五日

醤油は層需用拘御  
上場三店  
既成地イ位井置植面  
既成地イ位井置植面  
交町十二本植合白現金百五價  
既入絶對詳細

小作料より 土地提積 壱千域（内  
域賣却済） 置 ノロエステ  
ボリス驛及  
驛何れからも四拾貳  
ノーラ植民地

内四百五拾  
ノ線ベンナ  
及びビリグ  
貯キロ  
バ・プロミ  
ノ地帶 バ  
一 喜 伊 助 日 太 郎  
ヤ町 シエンシャ屋  
所内 八郵函十七  
ます  
ルに付  
無利息(四  
日貳拾餘の

# 主要諸國不振を示す 昨年度貿易高

日本及加奈陀にのみ  
現はれた貿易増加

伊伯通商條約  
リオ市で最後の折衝

## 本年四ヶ月間 亞國對外貿易不振 伯亞貿易は好調

ても輸出に輕度の減少を見せて居

る

ミシンは.....  
國產インペリアル

金二百斤兎 梶浦鐵次郎 加藤常

次郎 牧壽生 奈良久吉 増井信美 米澤照吉

白耳義 伊太利 八三、〇五〇〇

印度 印度

西班牙 西班牙

和蘭 和蘭

佛國 佛國

英國 英國

日本 日本

阿爾然丁 阿爾然丁

伯國 伯國

奈良久吉 增井信美 米澤照吉

金五十斤兎 尾崎均 高野松雄

庄司治 岩瀬榮太

金十斤兎 藤垣與市

加藤常男 松永源次

植田誠男 野上隆雄

金二百斤兎 佐藤次郎 本多豊吉 野上隆雄

金三斤兎 佐藤次郎 丹治重

金三斤兎 宮本義光 芹川直吉

金三斤兎 佐藤文太郎 丹治重

金三斤兎 佐藤文太郎 丹治重

金二十斤兎 金石芳太郎 丹治重

金二十斤兎 黒須文治郎 丹治重

金二十斤兎 金石芳太郎 丹治重





